

中国学友会設立総会での姫軍さんスピーチ

私は姫軍(ジジュン)と申しまして、日本では皆「ヒメ」と呼んでくれました。ヒメのイメージは全然ないのですが(笑)。私はこの1ヶ月間、毎日皆さんにeメールを出している人です。本日は本当に板橋理事長、川上参事官、加納理事、坂下事務局長、本当に遠くから、特にご高齢にも関わらず海を渡って来てくださったことに感謝します。

まず、準備委員会のメンバーを代表し、今回、どのように準備してきたかを報告させていただきたいと思います。米山奨学会は、日本の民間奨学団体の中で一番大きい組織です。1952年から今までに累計14,500人の海外からの留学生に対し奨学金を出していますが、この中で中国からの留学生は3,998人と、約4,000人が中国人の学生です。全体の割合は27.5%を示しています。昨年7月ごろ、坂下事務局長が北京にお出でになり、板橋理事長のお言葉を私に伝えました。つまり、「奨学生が一番多い国である中国に学友会がないことは非常に残念である」と。その言葉を受けて、「じゃあ作りましょうか」ということでスタートしました。準備に入ってわかったことは、2002年に既に上海で、米山学友会が設立されていました。中津川ロータリークラブのサポートを受けながら2002年からすでに活動していたのです。そのため、北京・天津といった華北の学友をまず集めて華北学友会を設立し、華北学友会と上海学友会と合同で「準備委員会」を設立し、今回の準備にあたりました。すでに確実に248名の学友と連絡がとれており、今日予定通りであれば参加した学友91名のうち、47名が北京以外の都市から来てくれました。本当にありがとうございます。最も南からは海南島、北からは内モンゴル・東北、西からは福州・アモイからの学友も来てくれています。色々な場所から集まってくれましたが、それではなぜ、我々はここに来たのでしょうか。なぜ、この会を設立するのでしょうか。私はその答えを、いまこの壇上で、皆を代表して回答しなければならないと思います。

ではまず、ある学友からの手紙を読ませていただきます。この学友は、袁萍(yuanping)さんと言い、四川大学の教授です。彼の手紙には次のように書かれています。

「3月6日、ロータリー米山記念奨学会事務局からのメールをいただき、米山記念奨学金中国学友会設立大会が3月28日に北京で開催されることを知りました。このニュースは2009年の私にとって、最も心温まる、記念になる春の贈り物となりました。私は1996年に日本の東海大学大学院医学研究科を卒業した米山学友、袁萍と申します。1997年に帰国し、四川大学の口腔衛生学院に勤めています。帰国してから仕事につき10年あまり過ぎましたが、留学期間にいつも暖かく見守り、支えてくださった米山奨学金への感謝の気持ちは長い時が流れた今でも忘れたことがなく、いつも奨学会のWebサイトを通じて奨学会の活動状況に関心を寄せております。中国国内で働いていらっしゃる米山学友の皆さんと出会い、交流することができることを心より嬉しく思っております。中国学友会の設立は、元米山記念奨学生としての夢でした。日本のロータリー米山記念奨学会、中国米山学友会事務局すべての皆さまに感謝を申し上げます。私は四川で勤めており、仕事の関係で今回は参加できませんが、設立大会のご成功を心よりお祈り申し上げます」

私はこの2~3ヶ月、皆さんにたくさんのeメールを出し、毎日100通以上のeメールをいただきました。どのメールにも、これと同じようなことが書かれていました。米山奨学金に対し、みな非常に強い感謝の気持ちを持っています。これは、皆さんからのeメールの共通点でした。この手紙を私は何度も読んで非常に心が熱くなり、やはり、皆さんの心の本音を言い表しているのではないかと思います。

なぜ、今日ここに集まるのか。その第一は、その原点は、米山奨学会への感謝の気持ちを持って皆来ているのではないかと、私は思います。これが第一です。

次に、なぜ来るのか。皆さんは感謝だけではなく、どのように恩返しをしようかと考えていると思います。中国には次のようなことわざがあります。「たとえ一滴の水でも受けた恩義は、湧き泉として報いるべき」と。これは中国人にとって忘れられないことです。つまり、「滴水之恩、当以湧泉相報」。では、どういう風に恩返しをするか。私は考えたことがあるの

中国学友会設立総会での姫軍さんスピーチ

です。ロータリーの皆さん、米山記念奨学会の皆さんは、我々よりもっと成功していて、我々が持っているものは、彼らは全て持っているし、我々が差し上げたいものも彼らは全て持っている。どうすればよいのか。私の世話クラブのロータリアンは私にこう言いました。「その恩義を我々に返すのではなく、次の若い世代に伝えてくだされば、それが我々にとって恩返しです」。その言葉を受けて私は非常に感動しました。我々は、米山奨学金がなかったならば、今、私はこの立っている私ではない。皆さんは、今そこに座っている皆さんではない。この奨学金をいただいて、我々は夢を持ちました。夢を実現する力をいただきました。このいただいたお金だけではなく、恩義を、どのように次の世代に伝えるかどうかが、我々の使命ではないかと私は思います。

3 点目は、感謝や恩返しだけではなく、最も意味あることがあると思います。中央テレビの番組に『岩松看日本』（白岩松が見た日本）というものがありません。これは、中国で初めて日本を紹介する番組です。この番組には一つの意味があります。つまり、愛と憎しみはとりあえず置いておいて、まず日本を理解しようという言葉です。この番組を見て私は非常に感心しました。ただし、私は一つ感じるがありました。つまり中国・中国人の日本に対する理解レベルが非常に低いということです。つまり中国・中国人、多くの方が日本人・日本をあまり知らないです。今日の会で皆さんを見て、一つ申し上げたい。皆さんは日本で日本人のように生活し、勉強し、仕事をしてきました。中国人の中で、皆さんが日本を最もよく知る中国人だと言えなければ、皆さんより日本をもっと知る中国人はいないと言えます。中国人の中で、皆さんが日中関係を友好に発展していく気持ちを一番望んでいる人でなければ、皆さんより日中関係の友好的な発展を望んでいる人はいないと思います。このような集まりは、我々全員にとって膨大な財産です。この財産は、たぶん中米関係、中欧関係にはあまり役立たないかもしれませんが。しかし必ず、絶対、中日関係の促進のために必ず役に立てると思います。ですから、中日友好関係をどのように発展していくかどうか。これは、我々の単なる「すべきこと」ではなくて、我々の責任、また使命です。この3つが、今日我々が集まった理由ではないかと思えます。皆もこのような気持ちを持って遠くから集まってくれたのではないかと思えます。

今日この会を設立するにあたり、今まで多くの人々の力がありましたので、ここで感謝を述べたいと思います。

まず、日本の米山奨学会理事長板橋様、事務局長坂下様、事務局の峯様、彼らの応援がなければ、多くの学友と連絡を取ることができませんでした。非常に感謝します。また、板橋様、加納様、70歳以上のご高齢で遠くからお越しいただき、我々の会をどれほど大切に思ってくださっているかがわかり、非常に感謝します。（一同拍手）

また、在中国日本大使館の宮本大使、川上参事官のサポートにも非常に感謝します。私が宮本大使にこの会の設立を話したところ、宮本大使はすぐに「参加します」と返事をくださいました。大使館にもこの会を大事にいただいて、本当に感謝します。あと、感謝したいところが、やはり最初に上海学友会をサポートしていた中津川ロータリークラブの杉本様、市川様、三尾様。2002年から今まで、長期にわたってサポートしてくださったことに感謝いたします。

そして、この会について皆さんに出した E メールは私の名前を出していますが、実は私が出したものではありません。われわれの事務局のメンバーが出してくれたものです。この事務局のメンバーは学友ではありませんが、彼らの存在は、この会の不可欠のもので、名前を読み上げさせていただきます。（以下、中国名を読み上げ）これらの人がいなければ、この会は成り立たなかったと思えます。

最後に、やはり皆さまに感謝したいです。特に遠くから、私の知るかぎり、妊娠6ヶ月の学友も「ぜひ来たい」と連絡をくれて、本当に遠くからいらっしやった皆さん、忙しい中いらっしやった皆さんに感謝いたします。皆さんがいなければ、この盛大な会ができません。皆さんがいなければ、この会の将来がないと思えますので、ぜひこれから皆さんと一緒にがんばりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。（一同盛大な拍手）

以上